一本の刃

一宮中・２　今泉　奈南

「ここ分かる人」
いつもの先生の声
私は分かった
でも
手が挙げられない

先生の質問に
みんなは一生懸命
手を挙げる
その腕はまるで
一本の鋭い刃のように
輝いている
でも私は
その刃を隠してしまう

答えのある数学や
理科の授業のとき
「間違えたらどうしよう」
「声を出すのが怖い」
そんな風に考えてしまう
考えを発表するときや
道徳の授業のとき
「自分の意見を言うのが恥ずかしい」
「みんなと違ったらどうしよう」

そんな風に考えてしまう
発言する人の意見は
みんな正しくて
いつも納得させられる
発言している人も
自分の考えに
誇りを持っていて
輝いている

私の意見は
みんなみたいに
正しくなくて
おかしいかもしれない
他人と比べて
心配ばかりしていれば
自分の考えに
誇りなんか持てやしない

みんなの刃がまぶしくて
鋭くて
美しくて
私の刃は
刃こぼれして
いつしか錆びていた

先生はよくこう言う
「間違ってもいいから発言してみよう」
この言葉に少しずつ
後押しされる

自分がいた

私の仲のいい友達が
がんばって
発言していた
その姿が
勇敢でまぶしかった

いつしか
「手を挙げてみたい」
少しずつ思うようになっていた

とある日の授業
「ここ分かる人」
いつもの問い
私は分かった
でも今までとは違う
今日の刃は
輝いていた
私は
力いっぱいに腕を
思いきり突き上げた
輝く自分の刃が
誰よりも
まぶしかった